

実践的な指導力を備えた教員の養成に関する研究（2）

－総合講義「教職実践研究Ⅱ」の構想について－

大久保 直 志〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕
隈 元 浩二郎〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

A Study of Teacher Development for Practical Instruction (2) : A Plan for “Research into Teaching Practice II”

OKUBO Naoshi・KUMAMOTO Kojiro

キーワード：実践的教職科目、実践的指導力、学級経営、生徒指導、学校体験

1 はじめに

本学部は、現在、特別教育研究経費による事業「県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施」（平成19～21年度）に取り組んでいる。その計画の一つに、実践的教職科目を軸とした新しい教育学部教員養成カリキュラムを設定し、高度な実践的資質をもつ教員養成体制を整えるとともに、総合大学である本学全体の教員養成にも総合的・継続的に支援できる体制の整備を図るということ掲げている。

実践的教職科目は、〔教職基礎研究〕（1年）、〔教職実践研究Ⅰ・Ⅱ〕（2年）、〔教育実地研究〕（3・4年）、〔教職応用研究〕（4年）、〔教職特論〕（研究科）等の科目で構想されている。〔教職基礎研究〕は1年生対象の必修科目として平成19年度後期から、また〔教職実践研究Ⅰ〕は2年生対象の選択科目として本年度前期に開設されている。この二科目の実践及び検証の概要については別稿に委ねることとし、本稿では2年生後期に選択科目として開設予定の〔教職実践研究Ⅱ〕の構想について述べることにする。

その際、実践的指導力のとらえ方やその形成過程の考え方が大きな課題となっている。当科目群の企画・運営には、大学の科目担当教員に加え、県教育委員会との人事交流による教員4人（教育実践総合センター在籍）も一緒に当たっている。そこには理論的側面だけでなく、学校現場の視点を組み入れた実践的側面からの教員養成機能の強化を図ることへの期待がある。そこで、まず実践的指導力について若干の考察を行いたい。

2 実践的指導力について

(1) 行政における資質能力のとらえ方

平成9年及び平成11年の教育職員養成審議会答申では、教員に求められる資質能力を、

- ① いつの時代にも求められる資質能力
- ② 今後特に求められる資質能力
- ③ 得意分野を持つ個性豊かな教員

の三項目に分け、応用力・課題解決能力・社会性・人間関係形成力など三十数項目の要素的能力を列挙している。そして、これらの必要な資質能力を身に付けるために、日々の実践的問題に基づく研修や自発的・主体的な研修を奨励している。

また、平成17年の中央教育審議会答申は、優れた教師の条件として、

- ① 教職に対する強い情熱
- ② 教育の専門家としての確かな力量
- ③ 総合的な人間力

の三つを挙げている。これらは、実践的指導力を直接規定するものではないが、臨床的場面で指導力を発揮するための基盤となる資質能力を示したものと見える。

平成18年の中央教育審議会答申では、教員としての実践的指導力の向上に幅広い人間性や深い教養が不可欠であるとしたうえで、教職大学院において養成すべき資質能力として四点を示した。

- ① 問題や事象に関して解決の方向を見通すことができる「解釈力・診断力」
- ② ①に支えられた具体的な問題解決策の「企画力」
- ③ ②を試みるために必要な、優れた授業力をは

はじめとする「実践的な展開力」

④ ①・②・③に関して客観的に評価したり反省的に思考する等の「評価力」

そして、各資質能力には、教員が個人として関わる観点、同僚・教員集団と共に協力して関わる観点、地域の教育力をつくり出す観点などの違いがあることを考慮する必要があることが付け加えられている。上記①～④は、教職活動の一連のプロセスを分節化して明示したものである。学部段階で育成する資質能力を検討する際の参考となるものとする。

(2) 実践的指導力とその形成

実践的指導力及びその形成過程について、高田(2004)は、以下の四点に限定して取り上げている(内容は執筆者要約による)。

① 「対象をとらえる力」

実践の対象、働きかける対象となる児童生徒をとらえる力。実践的指導力の基本。

② 「対象に働きかける力」

ほめる、叱る、問いかける、揺さぶるなど、児童生徒が学びや生活の主体者として生き生きと自主的に取り組むような活動を導き出すための働きかけを行う力。

③ 「活動内容を構成する力」

教材やカリキュラムなど、児童生徒が取り組むにふさわしい生活活動や学習活動の内容をつくり出し構成する力。

④ 「実践を認識する力」

自らの実践の事実を、蓄積された教育実践の知識・技術、理論・思想に照らしたり、直接体験を分析し経験化したりして、実践的指導力の獲得につなげる力。

この四点の力は、先述の中央教育審議会答申が示した教職大学院で養成をめざす四点の資質能力と同様の方向性をもつと考えることができる。

また、高田は、実践は可視的働きかけによる「客観的作用過程」と教師の内面的作用(主体的な意志・認識・情動)による「意識的内面的過程」の二側面をもつとし、「授業実践の進行過程における教師の認識、推測、解釈、判断、決断と

いった意識的内面的過程の的確さや豊かさこそ、教師の実践的指導力の中心をなす」と述べている。

それは教師の実践の姿をとらえる際に、教師の内面をとらえることを重視するということである。特に①・②・④は、実践者に対して他者が実践の意図を聞き込む活動が必要であると述べている。可視的な授業実践の事実や児童生徒の活動の事実などの背景に、教師の内面的過程としてどのような意図、解釈、推測、判断等があったのか、それは意図的であったのかなど、実践者の行為・認識が事実即して意識化・言語化されることにより、授業実践が分析対象となる。また、多様な教材観、子ども観、指導観をもつ教員が共同的に授業研究を行うことで客観性を高める効果があるという点にも注目すべきものがある。

3 実践的教職科目における位置付け

本科目開設のねらい及び内容等は、実践的教職科目における本科目の位置付けに制約される。科目群の構想としては、表1が設定されている。

表1 実践的教職科目の構想

コンセプト	科目名・内容等
ふれあう	教職基礎研究 (子ども観察、教職への動機付け)
関わる	教職実践研究Ⅰ(学習指導) 教職実践研究Ⅱ(学級経営、生徒指導)
やってみる	教育実地研究事前指導 (実習に向けた授業観察、模擬授業)
試してみる	教育実地研究 (授業研究、授業外活動、部活動指導)
掘り下げる	教育実地研究事後指導 (実習で見出した個別課題の研究)
振り返る	教職応用研究 (教師としての自己課題の探求)
拡げる	<大学院>教職特論、スクールリーダー 実践研究等 (インターンシップ、リーダー養成)

本科目に至るまでに、「教職基礎研究」,[教職実践研究Ⅰ]が位置付けられている。まず、それらの科目について概要を述べる。

「教職基礎研究」は、教職理解科目の必修科目

（2単位）で1年生後期に開設する。キャリア形成の一環として教職への動機付けを図ることなどをねらいとしている。三日間の学校体験と大学での講義・演習をセットにした実践的プログラムによる授業が行われている。

〔教職実践研究Ⅰ〕は、自由選択科目（2単位）として2年生前期に開設する。本年度は試行的取組のため定員を30人に限定した。この期の学生は、教職基礎研究での学校現場の授業観察や、各教科教育学の専門的な学習により、授業づくりへの意識が高まってきている。

一方で、3年時の教育実地研究（教育実習）に参加する学生について、学習指導案作成に多くの時間を費やし、学級経営等まで意識化できないという課題も指摘されている。そのため、教職実践研究Ⅰでは、2年時から学習指導の基本的知識・技能等を高める必要があるという考えから、各教科教育学の教員と連携し、授業づくりの考え方、学習指導案の書き方、授業参観の視点、模擬授業などを核とした実践的プログラムによる授業が行われている。

そこで、本科目では、上記二科目を踏まえ、以下のような意図をもって構想した。

- ① 教職及び児童生徒の理解、学習指導の基本的な理解を基盤に、学級経営及び生徒指導に視点を広げさせる。
- ② 一般的な学習指導の考え方を基盤に、離島・へき地での学習指導の取組についても関心をもたせる。
- ③ グループ活動における課題追究活動を重視し、協働性の大切さを経験させる。

②は本県教職員を志望する学生に共通して持たせたい認識であり、教員養成段階での位置付けが必要であると考えているものである。

〔教職基礎研究〕から〔教職実践研究Ⅱ〕において、学級経営・学習指導・生徒指導等について実践的に学んだことを生かし、教育実地研究において実感的に理解を深める学びを展開することを期待するものである。

4 実践的指導力との関連等

当科目群全体の系統的な構造については研究の

途上にある。また、実践的指導力の内容及びその形成過程についても、各科目を年次ごとに実践する中で徐々に明らかにしつつある段階である。

ここでは、本科目を高田による四点の力と関係付けながら、指導上の留意点を述べる。

① 基本的事項を理解させ見通しを持たせる

学級経営及び生徒指導等の基本的事項を理解させ学習の見通しをもたせることで主体的に参加する素地をつくる。

② 具体的な達成課題を意識させる

学級経営及び生徒指導の具体的な達成課題を設定し、課題意識を明確に持たせることで、学校体験や演習等に具体的な視点をもって参加できるようにする。これにより「対象を的確にとらえる力」の指導の在り方をさぐる。

③ 自らの判断を持たせる

実践的な学びは当事者意識の程度に左右される側面を持つ。臨場的な場面において自ら判断し行動することで実践的な資質能力を高めることができる。本科目はそうした場を確保する段階には無いが、学校体験における観察や演習等において、できるだけ個々の学生の認識、推測、解釈、判断等を促すような場面を設定することが必要であるとする。これにより「対象に働きかける力」や「活動内容を構成する力」との関連をさぐる。

④ 共同的活動を重視する

本科目では、学校体験グループを基本とした学習形態を中心に行う。課題設定、計画・準備、実践、省察、発表までを共同的活動によって取り組ませることにより、多様な角度から対象や事実を分析することの大切さ、協働性のよさを経験させる。これにより「実践を認識する力」の指導の在り方をさぐる。

5 指導計画

これまで述べた構想等をもとに、本科目の指導計画を以下に示す。

(1) 指導目標

ア 生徒指導、学級経営及び少人数・複式学級における学習指導を中心とした講義・演習、フィールドワーク等を通じて、教職の基本的な

事項をより実践的な場面に即して理解することができるようにする。

イ 学校教職員、児童生徒、同僚学生とのコミュニケーション活動や協働的な追究活動に積極的に参加するとともに、教師としての立場を意識して行動したり考えたりすることができるようにする。

(2) 学修目標 (学生の達成目標)

ア 学級経営の機能や展開などの在り方について理解し、自分のめざす学級の姿やそのための取組を考え、学級経営案を作成し説明できる。

イ 学校・学級における生徒指導の考え方について理解し、想定される具体的場面(教育実習等)に遭遇した場合の自分なりの手だてを考え、ロールプレイをしたり説明したりできる。

ウ 少人数、複式学級での学習指導の実践例や、情報教育技術を活用した教育方法等の取組を知り、特性を生かした指導や研修の工夫改善について理解を深めることができる。

エ 学校体験や演習等において教師としての立場を意識して行動したり考えを発信したりするとともに、相互に協力し学びを深め合うことができる。

(3) 内容及び方法

目標	主な内容
(2)	○ 学級経営の機能、視点及び展開等【講義】
ア	○ 学級経営の観点からの観察・体験【学校体験】 ○ 講義、学校体験の振り返り【グループ活動】 ○ 学級経営案の作成・発表【演習】
(2)	○ 学校、学級における生徒指導の考え方、教師の基本姿勢【講義】
イ	○ 生徒指導の観点からの観察、遊び【学校体験】 ○ 講義、学校体験の振り返り【グループ活動】 ○ 具体的場面に遭遇した場合の対応【演習】
(2)	○ 少人数、複式学級での学習指導【講義】
ウ	○ 情報教育技術を活用した教育方法等【講義】 ○ 学習指導の観点からの観察・体験【学校体験】 ○ 講義、学校体験の振り返り【グループ活動】
(2)	○ 本科目の位置付け、目標、追究課題、評価等の説明【オリエンテーション】
エ	○ 学校体験、課題追究活動【グループ活動】 ○ 自己課題の診断、評価【自己評価】 ○ ワークシート等のポートフォリオ作成

(4) 授業計画 (全15回)

《ステップ1》

学級経営、生徒指導及び少人数、複式学級での学習指導などについて講義を行い、基本的な理解を図るとともに、学校体験での観察の観点を示す。

【第1回】

- オリエンテーション、事前の自己評価
- 少人数、複式学級における学習指導【講義】

【第2回】

- 学級経営の機能や展開などの在り方【講義】
 - ・学級経営の機能、展開、取組例
 - ・学級経営観察の観点 など

【第3回】

- 生徒指導の基本的な考え方【講義】
 - ・生徒指導の基本、教師の姿勢、対応例
 - ・生徒指導観察の観点 など

《ステップ2》

学校体験及び前後の一連の取組成果について、グループごとに企画・実践・省察・討議したものを観点に沿って発表をさせる。

【第4回】

- 学校体験に向けて(1)【グループ活動】
 - ・自己紹介準備、日程確認、観察の観点、集団遊び企画 など

【第5回】

- 学校体験に向けて(2)【グループ活動】
 - ・自己紹介及び挨拶練習、生徒指導的な具体場面への対応の仕方協議 など

【第6・7回】

- 学校体験(1日)【フィールドワーク】
 - ・計画に基づく観察・体験、交流、講話等
 - ・観察記録・自己省察

【第8回】

- 講義及び学校体験の振り返り活動【グループ活動】
 - ・記録整理、観点に基づく省察、成果課題など

【第9回】

- 成果発表の準備【グループ活動】
 - ・内容検討、発表資料等の分担・作成

【第10回】

- 各グループの成果発表及び集団討議【討議】

《ステップ３》

講義及び学校体験で学んだことを基に、それぞれの追究課題について教師としての考えを明確にもたせ発表させる。

[第11回]

- 離島・へき地における情報教育の活用【講義】
 - ・情報教育技術の活用，遠隔教育システムなど

[第12回]

- 想定される具体的場面（教育実習等）に遭遇した場合の手立て【演習】
 - ・具体的場面の設定，手だて検討，役割演技等

[第13・14回]

- 「私の学級づくり」の構想【演習】
 - ・学級経営案作成，発表

[第15回]

- 総括【講義】
- 事後の自己評価，授業アンケートなど

(5) 学校体験について

上記授業計画のステップ２の学校体験では、個々の学級経営や生徒指導の観点に照らして、自分の遭遇した諸教育指導や児童の活動の事実等をとらえ、記録・考察したり、教師として児童と共に生活したりする。実施に当たっては、日置市内の小学校７校の協力を得て実施する。これらの学校はいずれも３・４年生の教育ボランティア受入校でもある。以下に、学校体験の概要を示す。

ア 期間

11月25日(火)～28日(金)のうち1日間

イ 学生の配置

定員30人（1年時「教職基礎研究」履修済の2年生対象。校種及び教科は混在する見込。）

ウ 観察・体験の内容例

① 学級経営

＜観察・体験の観点＞

- 学級の目標
- 学級の特性を生かした学級づくり
- 受容的な学級の雰囲気づくり
- 児童の状況把握，よさを生かす工夫
- 集団のまとまりや交友関係の把握，指導
- 教室の設営や環境づくり
- 他学年や家庭等との連携

- 放課後等の業務（補充指導，教室整理等）

＜観察・体験の場＞

朝の会，係活動，職員朝会，各授業時間，校長・教頭講話，休息・放課後の時間など

② 生徒指導

＜観察・体験の観点＞

- 生徒指導（生活指導）の目標
- 学校，学級生活の規律を守る指導
- 具体的場面での教師の指導の仕方
- 教師と児童の温かい信頼関係づくり
- 心の状態の把握，認め励ましなどかかわり
- 集団の自主的・実践的な活動づくり
- 他学年や家庭等との連携
- 休憩時間を利用した集団遊びの企画・実施

＜観察・体験の場＞

朝の会，係活動，職員朝会，各授業時間，休憩時間，給食・清掃指導，放課後の時間など

③ 学習指導

＜観察の観点＞

- 少人数，複式学級の指導の工夫（ずらし，わり，ガイド学習，教材教具の工夫など）
- 日置市T Aボランティア学生による指導
- 学習の仕方やしつけの指導（T・T指導形態，T Aのかかわり方など）

＜観察・体験の場＞

各授業時間

(6) 評価規準及び評価方法

本科目における評価規準は以下の示すとおりである。

[評価規準]

- ▶ 学級経営の基本的事項を理解し，学級経営案を作成できたか。
- ▶ 生徒指導の基本的事項を理解し，想定される具体的場面に遭遇した場合の対応を説明できたか。
- ▶ 少人数，複式学級の学習指導上の主な工夫点について説明できたか。

ただ，これまで述べてきた実践的指導力の考え方に対する評価の在り方についてはまだ十分な検討がなされていない。評価基準の設定をはじめ、

ポートフォリオ等の評価方法、評価資料等を実践に即して検討する必要がある。

て教員の資質向上に努めていきたい。

6 検討課題

(1) 実践的指導力とその形成過程について

実践的指導力をとらえる指標の設定の仕方や、その形成過程をどう考えるかという点は、学部段階の教員養成カリキュラムの内容・構成を開発する上で重要な課題である。

これまで、平成18年の中央教育審議会答申における「教職実践演習(仮)」の「3 到達目標及び目標到達の確認指標例」を基盤においてプログラムの在り方を検討してきたが、今回、実践的指導力に焦点を当てて考察を試みようとしたとき、「最小限必要な資質能力を最終確認する」指標例が総括的・網羅的であるため、他の研究者等の理論を求める必要性が生じた。

今後とも様々な研究者や他大学等の実践研究、本学での実践の積み重ね等を経て、実践的指導力とその形成過程の考え方を明確にし、実践的教職科目の体系を確立していく必要がある。

(2) 学校現場と大学の往還的な学習の充実

実践的教職科目では、臨床的場面における計画・実践・省察の螺旋的・反復的学修により、両者の有機的な関連をもたせた深い学びを体現させることが求められる。特に、4年時の教職応用研究では、個々の課題解決に応じた多様な実習や体験が求められることになる。

今後は、教育実習をはじめ学校体験、教育ボランティア等の学外教育活動を考慮した教育課程の在り方を検討することも重要な課題である。

7 おわりに

本科目は構想段階であり、今後、本年度後期の実践により検証を行う。その結果の考察及び評価については、改めて別稿により報告することにする。

今、教育の担い手である教員に対する揺るぎない信頼の確立が求められている。これについて、学部の教員養成段階において実践的指導力の育成に取り組む意義は非常に大きなものがある。今後とも実践的教職科目群のカリキュラム開発を通し

引用・参考文献

- 鹿児島大学教育学部 特別教育研究経費(継続事業)進捗状況報告書 2007
- 高田 清 2004 確かな学力と指導法の研究 日本教育方法学会編 図書文化 p82 - 96
- 教育職員養成審議会答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について(第1次)」 1997.7
- 教育職員養成審議会答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について(第3次)」 1999.12
- 中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」 2005.10
- 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」 2006.7